

中国研究所研究大会「鄧小平後の中国と国際環境」(1997年5月24日、文京区民センターにて)

報告Ⅰ 鄧小平後の中国——権力の空白の行方

(神奈川大学) 田畑 光永

——まえおき——

田畑でございます。「鄧小平後の中国——権力の空白の行方」ということで、報告させていただきます。このタイトルにすでに私の結論はこめられているわけで、「鄧小平が世を去った今、中国は政治権力の空白状態にある」というのが、私の基本的な理解であります。なぜ、そんなことが言いたいのかと問われれば、よく聞くように「鄧小平時代が終わって、今度は江沢民の時代が来た」というような、そんな簡単なものではないだろうという思いがあるからです。

「江沢民時代到来説」の根拠として挙げられているのは、現に江沢民は党の総書記、国家主席、党と国家の中央軍事委主席と、三つの最高ポストを一身に集中していることのほかに、鄧小平の死以前にすでに、鄧小平辦公室の影はすっかり薄くなって、江沢民辦公室がすべてを取り仕切っていたとか、鄧小平の死の直後に開かれた今年（1997年）の全人大では、要人といわれる人々がいずれも「江沢民同志を核心とする党中央」という言葉を使って、江沢民が最高指導者であることを認めたというような事からです。

しかし、私に言わせれば、これらの事実は今、中国で形式的に江沢民の上に立つ人間はいないということを意味しているにすぎません。そして、それは1989年に江沢民が鄧小平に呼ばれて上海から北京に移り、天安門事件の後、趙紫陽に代わって党総書記に就任した時からそうでした。その後、89年11月に中央軍事委主席を鄧小平から譲られ、さらに93年春の全人大で楊尚昆に代わって国家主席に就任して現在に至っているわけですが、だ

からといって、その間、江沢民が中国の権力者であったとは言えません。権力者は言うまでもなく鄧小平でした。彼が形式的に平黨員になったからといって、彼が権力者でなくなったとは思いませんでしたし、現に92年の第14回党大会で発足した現在の指導体制が鄧小平の意向で作られたものであることは確かです。

では、その間の江沢民の役回りは何であったか。鄧小平の権力の代執行者であったということでしょう。一体、いつから鄧小平が肉体的に気力や判断力や言葉を失ったかは明らかではありませんが、すくなくともそうなるまでは権力は鄧小平にありました。では、その後、彼の権力はどこへ行ったか。どこへも行かず、「消失した」と私は考えます。彼の死はそれをはっきりさせたにすぎません。

鄧小平の死の直後、興味深いことがありました。軍の各組織が次々と会議を開いて、江沢民（軍委）主席に忠誠を誓うという儀式がおこなわれました。江沢民は89年11月以来、軍事委の主席です。鄧小平が死んだからといって、何故あらためて忠誠を誓わせる必要があったのか。主席が誰であろうと、軍の忠誠心は鄧小平に向いていたからでしょう。中国に有名な笑い話があります。臆病者があつた時、二百両という大金を手に入れたが、取られはしないかと心配でたまらない。そこでこっそり穴を掘って埋めた。それでも誰かに掘り出されはしないかと心配でたまらない。そこで埋めた場所に「ここには銀二百両は埋まっていない（此地無銀二百両）」という立て札を建てたという話です。鄧小平の死後、慌てて軍に忠誠を誓わせた江沢民とこの臆病者はどこか通じるものがあるような気

がします。

江沢民時代の到来を説く論者も、毛沢東や鄧小平と比べれば、江沢民の威信が小さいことは認めます。が、それについては「時代が違う」という言い方が用意されています。革命を経て建国された直後は強力な指導者が必要だったし、文化大革命の混乱を收拾して、改革・開放路線へと大きく舵を切るにも、やはり強力なリーダーシップが必要であった。しかし、今や改革・開放路線は定着し、中国は安定期に入った。もはや毛・鄧型の指導者の時代ではない。江沢民は新しい時代の新しいタイプの指導者だということです。

これには相当の説得力があります。確かに今の中国には、かつての革命時代や建国当初のような強力な指導者は必要でもなく、また求めても得られないでしょう。そういう意味では江沢民は新しい時代の指導者としての資格を備えているのかもしれない。

しかし、この議論にも重要な欠落部分があるように思います。つまり、権力とは権力をもつ側（あるいは持っているつもりの方）だけで成立するものではないということです。誰かが権力を持つということは、その権力に従おうという何らかの合意が支配される側にあって、はじめて成立する状況だということです。これはなにも事新しい議論でもなんでもないので、江沢民時代到来説にはこの当然の前提が抜け落ちているように思われますので、その点から今の中国の政治状況を考えてみたいというのが、今日の私の報告の趣旨です。

——Legitimacy (正統性, 正当性) について——

権力者がその支配を支配される側に受け入れさせるもの、逆に言えば、支配される側がその権力を容認するなにか、これを英語では権力の Legitimacy という言葉を使い、日本語では「正統性」とか「正当性」とかの言葉をあてますが、中

国の歴代の権力の正統性を吟味して、その文脈の中では鄧小平後の中国はどうなるのか、というのが、私のテーマということになります。

まず Legitimacy という言葉ですが、これを「正統性」とするのは何となく具合が悪い。封建王朝の血統の正統性のように見えますし、同じ音で「正当性」とするのも正しいとか、合法的とかいう意味にとられそうです。しかし、ほかに適当な言葉もないので、ここでは仮に「正統性」としたいと思います。要は支配、被支配の関係において権力を成り立たせる要因は何かということです。そして、それには決まった形があるわけではなく、いろんな形がありえます。

その種類には通常、四つないし五つくらい考えられます。まず合法的な手続きで成立した権力は、文句なしに正統性があると言えます。次に非常に狭い意味での文字通りの正統性。例えば王朝の系統における正統性で、前皇帝が死んだ後、その嫡子が皇帝の位につく。その世襲には支配される側にも容認が生まれる。さらには社会的な妥当性とも言うべき形。ある社会状況の中で国民の多くが欲している形の権力なら、みんなが喜んでその支配に従うという「正統性」がありうる。このほか倫理的な正統性とも言うべき形がある。例えば宗教的権威がそのまま世俗的権力をも行使するという場合がそれにあたる。さらにつけ加えれば強権的正統性というものもありうる。強力な軍事力で有無を言わずに支配するという形です。そしてこれらは一つの政権が一つの正統性だけを持つとは限らず、時期によって正統性の内容が変わることもよくあるわけですが。例えば軍事クーデターで出来た政権がある期間が過ぎた後、選挙を実施して合法的な正統性を獲得する場合もあるし、国民の期待を背負って、つまり社会的な妥当性によって生まれた権力がいつのまにか強権的な権力に変質することもあります。

これに関連して思いおこされるのは、有名なマ

ックス・ウェーバーの「支配の類型」です。ウェーバーは支配の形について、合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配、この三つの類型をあげています。これも「正統性」を考える上で非常に有効な区分けかなと思います。合法的支配というのは、要するにその典型は官僚性支配。つまり一定の合意されたルールにもとづいて支配が行われる形です。伝統的支配というのは、家父長性社会における支配関係のようなもので、家父長に対する臣民、家臣、民衆の忠誠心、権威対忠誠という形の支配関係。そしてもう一つが有名なカリスマ的支配。カリスマという言葉の語源は、神の恩寵を受けて、特別の才能を与えられた者、あるいはその才能という意味のギリシア語だそうですが、要するに非日常的、超自然的、常人には持てないような特別な能力を持つ支配者による支配ということでしょう。

——中国における権力の正統性——

さて、そこで辛亥革命以降における中国の権力の正統性を考えてみたいと思います。なぜ辛亥革命以降か、と言えば、それ以前はまた難しくて私の手にあまるというのが正直なところです。

1911年の辛亥革命で清朝が倒れました。倒した勢力は新しい国号を中華民国、つまり「民の国」として、それまでの歴代専制王朝とは違う政治体制を目指しました。この段階でその国名通りに民が権力を握るためのルールが出来て、みなそれぞれに従うことになれば、中国のその後の歴史は随分ちがったものになったのですが、残念ながらそうはなりませんでした。

経緯を簡単にふりかえって見ますと、ご承知のようにまず新しい国の元首には、かねて革命運動に奔走していた孫文が迎えられて、臨時大總統に就任しました。その手続きは清朝に対して独立を宣言していた十四省に三省が加わっての十七の省の代表が各省一票で投票したもので、孫文は十六

票を獲得しました（ほかには黄興が一票）。しかし、この孫文の「合法性」ははなはだ力弱いものでした。孫文に力がなかったというより、孫文を選んだ革命勢力側に力がなかったわけで、1912年の初めには孫文は当時、清朝の大立者として力のあった袁世凱に臨時大總統の地位を譲らなければなりませんでした。袁世凱の力の源泉は言うまでもなく、新軍の創設者としての軍隊に対する大きな影響力でした。

この年の末から翌年初めにかけておこなわれた初の国会選挙では、孫文を理事長、宋教仁を理事長代理とする国民党が、衆参両院でそれぞれ過半数には満たなかったものの圧勝しました。その結果、宋教仁が内閣を組織して、総理の座につき、袁世凱の独裁権力にブレーキをかけうると期待されましたが、袁世凱は刺客を放って、3月、宋教仁を暗殺してしまいました。こうした袁世凱の横暴に1914年の夏、南方七省の革命派は反袁の第二革命を旗揚げしますが、わずか二ヶ月の戦闘で敗北してしまいました。

こうして、辛亥革命の後に生まれた権力は袁世凱の武力による政権でした。せっかく「民の国」を目指しながら、統治権をどういう手続きで誰が握るかについてのルール作りは挫折してしまいました。そして、その後、現在まで八十数年が経過しましたが、結局、そのルールは未だに出来ていません。したがって、正統性を合法性に求めて成立した権力はまだ生まれていません。もう少し続けて、歴史をふりかえって見たいと思います。

権力を握った後の袁世凱は1915年12月に皇帝を称しますが、さすがに帝制反対の世論は強く、わずか八十三日でみずからその座を降り、悶々の内に16年6月に五十六歳で生涯を終わりました。

袁世凱の死後もその流れを継ぐ北京の北洋政府は存続はします。とりあえずは総統に黎元洪、総理に段祺瑞という体制をとりますが、全土を支配する力はなく、内部もまた混乱を続けましたから、

各地には軍閥が割拠して、中国は分裂の時代に入ります。中国を一つの実体としてみれば、権力不在の時代が十年ほど続きました。

この状態に終止符を打ったのが蒋介石の北伐です。1926年7月、彼を総司令とする国民革命軍は南の広東から打って出て、北へ攻め上りました。それから二年の間、蒋介石による共産党排除のクーデター、国民党の左右両派への分裂、そして統一、さらに日本軍と北伐軍との衝突（済南事変）など、さまざまな大事件が起こりますが、とにかく1928年6月、北伐軍は北京に入城して、蒋介石は孫文の墓に北伐完成を報告し、さらにこの年の12月、東北の張学良も国民政府に忠誠を表明し、蒋介石による全土統一が完成しました。

勿論、国民党と分裂した共産党は江西省に根拠地を作りつつありましたが、各地の軍閥も全部が北伐軍に負かされたというわけではありませんでしたが、とにかく全土に号令をかけうる政権が誕生したことは確かです。国民政府主席の座についた蒋介石の権力が武力によってもたらされたものであることは言うまでもありません。

蒋介石の統一は各地の軍閥を国民政府に参加させるという形の軍閥連合でもありましたから、権力争いで1929年、30年と反蒋をかけた軍閥軍との戦い（蒋桂戦争、中原大戦）が起きますが、これも結局武力でかたがつけられました。

この蒋介石政権は1949年に台湾へ移るまで、約二十年続きました。その間、満州事変、共産党に対する何度もの包囲討伐戦、日中全面戦争勃発による抗日統一戦線の結成、対日勝利、そして共産党との再開内戦における敗北と、いはば非常時続きでしたから、あらためて統治権についての全国民的に合意されたルール作りなどは到底不可能でした。

——毛沢東の登場——

さて、いよいよ毛沢東の共産党政権の登場です。

1946年から3年にわたった内戦で、蒋介石の国民党軍は一敗地に塗れて、台湾へ落ちのびました。ですから、毛沢東の権力の正統性も武力によるものです。毛沢東自身が「政権は銃口から生まれる」と言っていた通りになりました。1911年以来、三人目の権力者です。

袁世凱、蒋介石、そして毛沢東、この三人はいずれも武力によって権力を勝ち取りましたが、比べてみますと、中でも毛沢東の権力は群を抜いて大きかったように思われます。その理由はいくつか考えられます。まず、同じ武力による権力奪取といっても、それぞれ条件が違います。

袁世凱の場合は打倒されるべき清朝はすでに氣息奄々としているのに、打倒する側にもこれといった中心的な力がないという奇妙な状況の中で、相対的に強い力を擁していた彼に権力が転がりこんだということだったでしょう。なるほど、宋教仁暗殺とか第二革命鎮圧というところで腕力を見せましたが、お山の大将といった雰囲気は濃厚です。

蒋介石の場合は各地に盤踞する軍閥に順番に果たし合いを挑むという、いはば道場破り型です。それも実際に戦いらしい戦いがおこなわれたのは、四・一二クーデター前の前半戦で華南の呉佩孚、孫伝芳を破ったところくらいまでで、1928年からの後半戦では馮玉祥、閻錫山、李宗仁といった各地の軍閥をそれぞれ第二から第四集團軍の総司令（蒋は第一の総司令）にするといった具合に、軍閥連合軍を形成してそのまま北京に乗りこんだという形でした。前述したように、蒋介石もその後、彼に反対する軍閥の攻勢をとにかくしのいで、国民政府を維持し続けたわけですから、黄埔軍官学校の校長として築いた実力は相当なものがあつたでしょう。しかし、一方では日本軍が東北軍閥の張作霖を爆殺したために、その息子の張学良が28年（統一完成）、30年（中原大戦）の二度にわたって、いいところで蒋介石支持にまわっ

たというツキにも恵まれたと言えるでしょう。

袁、蔣の二人に比べますと、毛沢東の場合はだいぶ様子が違います。毛沢東が共産党の実権を掌握したのは、1935年1月の貴州省遵義での中央政治局拡大会議ですが、この時の共産党は蒋介石の包囲攻撃を受けて、江西省の根拠地を放棄して「長征」という名の逃亡の旅のさなかにありました。ところが、その秋、陝西省の延安にたどり着いて、あらためて根拠地を作ってから、十四年後、毛沢東は中華人民共和国の主席の座につきました。

最後は軍事力で蒋介石を圧倒したのですが、そこに到るまでの毛沢東の政治力、指導力は文字通り「偉大な」という形容詞にふさわしいものでした。まず、日本の侵略を迎えて、世論を味方に抗日統一戦線の結成に成功します。彼は首に賞金を懸けられた反乱軍の首領から、中国の公認された政治勢力の一方の指導者となります。そして、抗日戦勝利。再発した内戦も当初の兵力比はおおよそ四対一と数の上で圧倒的に不利でしたし、蒋介石軍にはアメリカが惜しみなく最新兵器を供与しました。にもかかわらず、毛沢東はわずか三年でその天秤を逆転してしまいました。共産党の勝利にはもとより相応の理由があるはずですが、毛沢東の政治力、指導力を抜きにしては、あのほとんど奇跡とでもいうべき勝利は語れません。

こうして力で蒋介石を台湾に追い出して、毛沢東は権力を握りましたが、権力の中樞が存在しない中で権力を奪った袁世凱や蒋介石とちがって、彼はとにかくエスタブリッシュされた国民党政権に対する反乱を起こして、勝利したわけです。反乱の首領となるということは、そこから先の運命は二つに一つです。成功して、国を自分のものにするか、失敗して首を切られるかです。反乱のナンバー・ツーなら、場合によってはナンバー・ワンを売ることによって命を永らえることもあり得るでしょうが、ナンバー・ワンにはその道はありません。したがって、反乱を指導して、国取りに成功した

場合、その権力はとりわけ強大になるはずです。

その毛沢東の支配は先のマックス・ウェーバーの分類に従えば、まさにカリスマ的支配、特別の才能を与えられた者による支配でした。彼を讃える有名な歌、「東方紅」の「中国出了個毛沢東」という一節はカリスマの登場そのものです。

——強すぎた権力の悲劇——

さて、革命の勝利があまりにも奇跡的であったことが、後に毛沢東本人にも、中国にも悲劇をもたらしたような気がしてなりません。

まず、毛沢東の権力があまりにも強大で、彼自身が大衆の信仰の対象となるような存在であったために、彼とて生身の人間であるにもかかわらず、いつの日かの彼の権力の消滅を前提とする権力の継承、つまり統治権者の決定についての手続きが討議もされなかったことです。文化大革命期、毛沢東が老いを加えるのに対して、人々はただ「毛主席万寿無疆！」という祈りにすぎないスローガンを叫ぶだけでした。

当の毛沢東本人はといえば、「国民の支持」ということを考えたふしはあります。1956年、東欧の共産党政権が反政府運動で揺れた後、彼は有名な「百花齊放、百家争鳴」を唱えて、共産党への批判を歓迎する態度を打ち出しました。しかし、その後の経過を見ると、それは批判を受け入れようとしたわけではなく、国民の一致した支持が自分および共産党へ集中していることを確認するための呼びかけでありました。ですから、人々が本気で共産党批判を始めたとき、彼は手のひらを返して、批判の呼びかけは「蛇を穴から誘いだすための策略だった」と言っているのを見て、反右派闘争を展開したのでした。自分が批判されるなどとは、彼は夢にも思い及ばなかったのでしょうか。ですから、自分への批判を口にするような人間は、極少数の階級敵に違いない、となるわけです。これも奇跡の勝利の後遺症ではないかと思います。

もう一つ、奇跡の勝利の後遺症と考えられることは、社会主義建設についての毛沢東の楽観主義というか、困難さの軽視といったものです。延安に根拠地を築いた当初、国民党のきびしい経済封鎖に会って、戦いと生活は困難をきわめました。その苦境を共産党は幹部と大衆が一緒になって生産活動を進めることで切り抜けました。また、日本軍に対するゲリラ活動でも、国民党軍との内戦でも、彼の呼びかけに大衆は積極的に応えました。

そうして毛沢東は勝利し、全中国を自分のものとししました。ところが党と国家の主席として中南海におさまった彼にとって、建国後の状況は必ずしも満足のゆくものではなかったのではないのでしょうか。大衆を立ち上がらせれば、奇跡をなしとげるはずなのに、思ったほどには建設は進まない。おそらくその苛立ちからでしょう、彼は五十年代後半以降、急速な農業集団化、土法製鉄などの大躍進、さらには人民公社化といった急進政策を実施してゆきます。

しかし、戦争という特殊な条件のもとで、また根拠地という限られた範囲で成功したことが、平時にあの広い国土で成功するとは限りません。実際に実務を取り仕切っていた高級幹部たちは皆、そのことを知っていたのでしょうが、なにしろ毛沢東の存在は特別ですから、彼の政策に表立って反対は出来ません。その結果、農村は疲弊しました。たまたま、1959年夏の廬山会議（中央政治局拡大会議）に際して、批判の声を上げた彭徳懷国防相（当時）はたちまち毛沢東の逆鱗に触れ、失脚します。それも彭が私信として毛に書いた意見書を毛の方が一方的に公開して、「反党綱領」と攻撃したのです。そして、内心では彭徳懷に同感したはずの高級幹部たちも、毛沢東の立腹の前ではほとんど毛沢東に同調します。

そういう状態ですから、毛沢東の権力を相対化して、ポストの交代とか移譲とかを制度化するなどということは考えられもしなかっでしょう。も

っとも、毛沢東とて大躍進などの急進政策が絶対に正しいと固執したわけではなく、相応の修正も加え、またこの年4月の全人代では自ら「理論的探究のため」と国家主席のポストを当時ナンバー・ツーの劉少奇に譲りました。しかし、それによって毛沢東の権力が弱まったわけではないことは、その直後の廬山会議の顛末が物語っています。

この後、劉少奇らがとった戦術は表向きは毛沢東の路線を執行しているように装いながら、実質はそれを穏健な形に改める「調整政策」でした。それに毛沢東が不満であったことは、1960年代後半、彼が文化大革命を発動して、劉少奇、鄧小平ら実務派高級幹部の（周恩来を除く）ほとんどを失脚させたことで明らかです。中でも悲惨だったのは、国家主席の劉少奇で大衆運動の標的とされて横死しました。そのほか沢山の悲劇が生まれました。毛沢東の呼びかけで大衆が奇跡を演ずることは、ここでは皮肉な形で実証されました。あのように大規模で、常識では考えられないような大衆運動は現代政治の「奇跡」としか言いようがありません。

この文化大革命の中で、それまでタブーだった毛沢東の「後継」問題が浮上しました。軍を動員して文革の先頭に立ち、劉少奇にかわってナンバー・ツーにのし上がった林彪国防相（当時）が、1969年4月の党九全大会で採択された規約に「毛沢東同志の親密な戦友であり、後継者である」と書きこまれたのです。党の規約としては妙なものですが、劉少奇の悲劇的な最期にナンバー・ツーの危うさを見た林彪としては、こういう保証が欲しかったのでしょう。ともかくこうして、手続きも何もなしに、降って湧いたように毛沢東の後継者が決まりました。

しかし、この「後継者」がどうなったかは周知のところ。「保証」からわずか二年後に、毛沢東と対立し、一家をあげてモスクワへ飛行機で逃亡を計り、途中モンゴルの草原に墜落してあえ

ない最期をとげました。もっともそれは公式発表ですから、事実がその通りかどうかはまだ分かりませんが、これで後継問題も御破算になりました。

劉少奇、林彪と二人までもナンバー・ツーが非業の死をとげ、さらにその五年後、周恩来が癌で世を去った1976年1月には、毛沢東も八十三歳を迎え、いよいよ後継問題が現実のものとなりました。当時、最高指導部内では周恩来によって文革での失脚から救い上げられた鄧小平と、毛夫人の江青らいわゆる四人組がにらみ合っていました。そして、周恩来を追悼する大衆を四人組が押さえつけたことで起こった第一次天安門事件（76年4月）の後に開かれた中央政治局拡大会議で、毛沢東は鄧小平をもう一度失脚させます。しかし、後継者には江青でなく、五十歳台の壮年幹部である華国鋒公安部長（当時）を選びました。後継者という言葉こそ使われませんでした。華を党第一副主席兼首相に任命して、後継者であることを明確にしたのです。

——共産党における権力移譲——

毛沢東はその五ヵ月後、9月9日に八十三歳の生涯を終えました。中国共産党は政権獲得から二十七年目にして、初めて権力者の交代という事態を迎えました。ここでの問題はいかに毛沢東の権力が強大であったにしても、彼の指名が彼の死後まで有効で、権力が毛沢東の考え通りすんなり華国鋒にわたるかどうかということでした。

毛沢東が華国鋒を選んだことは周知の事でしたが、江青が後継者の地位を狙っていることも明らかでした。そういう時にどうするかは何もきまりがありません。中国共産党においてはそれまで四十年以上にわたって最高権力者はただ一人しかおらず、主席は中央委員会が選出すると形式的に決まっていただけだからです。

現実には、さすがの毛沢東も死後までは皆を縛ることはできませんでした。江青たちは華国鋒の

主席就任を認めようとせず、双方のにらみあいが一ヵ月近く続きました。その間、江青たちは北京の中南海に自分たちの司令部を設置し、全国の情報を集め、また彼らの地盤である上海では民兵に武器を配って緊急事態に備える一方、中央では江青が自分も出席する（本来は出席資格のない）中央政治局常務委員会の緊急会議を開いて、「重大問題」を討議するよう要求したり、仲間の張春橋が中央政治局会議の席上、江青を「しかるべきポスト」につけるよう要求したりして、公然と権力奪取を企てたとされています。

この対立に決着をつけたのは、議論や採決といった平和的な方法ではありませんでした。10月6日、華国鋒、葉劍英、汪東興（中央警衛局長・当時）らはこの夜八時に中央政治局常務委員会を中南海に招集し、集まってきた江青派の張春橋、姚文元、王洪文を「隔離審査」の名目で汪東興配下の兵士が逮捕し、江青本人も中南海の住まいで逮捕されました。この「実力行使」の後、その夜のうちに郊外の玉泉山で中央政治局会議が開かれ、華国鋒たちのとった措置に賛成し、翌日の会議で華国鋒を党と中央軍事委員会の主席に任命することが決定されたのでした。

この経緯は直後には外部世界にはさっぱり伝えられませんでしたから、二週間以上も経ってから公表された時には、毛沢東の遺志によって権力を手にした華国鋒が、すぐさま毛夫人やその側近を逮捕したかのように、私などは錯覚したのですが、事実は逆で、華国鋒が機先を制していわゆる「四人組」を逮捕したからこそ、彼は主席の座に就くことができたのでした。つまり、華国鋒の権力は毛沢東の遺志によったものでもなく、また平和的な手続きによったものでもなく、小規模とはいえ「力」の行使によったものでした。袁世凱、蔣介石、毛沢東と続いた辛亥革命以来の武力による政権奪取の伝統は華国鋒においても引き継がれたこととなります。

勿論、華国鋒の場合は共産党という政権の座にある統治集団の内部における権力争いですから、前の三人とは力の行使と言っても状況も規模も違います。しかし、華国鋒が主席に就任してから、彼を讃える際にもっとも強調されたのが、彼が果敢な行動によって「一挙に四人組を粉砕した」事実だったことは、彼の権力の正統性がそこにあったことを物語っているでしょう。

こうして誕生した華国鋒の政権は長続きせず、二年余りで華国鋒自らが復活のチャンスを与えた鄧小平に実権を奪われます。その原因を考えるのはこの報告の範囲外ですので、ここでは華国鋒から鄧小平へという共産党政権下での二度目の権力者交代の形だけを見ることにします。それは前例のない形でした。

華国鋒が鄧小平に実権を奪われるのは、1979年12月の党第11期3中全会の前、その中央委員会に臨む方針をめぐって、中央政治局常務委の内部が割れ、華国鋒は少数派となって、自ら指導権を放棄したとされています。当時の常務委は主席の華国鋒のほか四人の副主席で構成され、その四人は葉剣英、鄧小平、李先念、汪東興でした。一見してわかるように、この内の葉、鄧、李の三人は長老に属し、華と汪はそれより一世代若い指導者です。具体的な対立点は文革を否定し、大胆な路線転換を図る長老組に対して、華と汪はあくまで毛沢東の指示を守っていこうと主張し、それが文革中に失脚した幹部の復活問題などでの衝突となったようです。

そして、対立点は常務委の五人での採決にかけられ、長老組がことごとく華と汪を三対二で押し切ったために、華国鋒は自ら指導権を放棄したとされています。確かに、翌年から中国は鄧小平の主導のもとに改革・開放路線に針路を転換し、華国鋒は影が薄くはなりましたが、引き続き1981年6月の中央委員会まで主席の椅子に留まります。権力放棄即失脚ということにはなりませんでし

た。珍しい平和的な権力移譲でした。

——鄧小平の場合——

それではこの交代劇によって、権力奪取は武力によるというそれまでの伝統はここで終止符を打たれたと言えるのでしょうか。そうは言えないと私は思います。それを検証するためには、もうすこし時日の経過を追ってみる必要があります。

鄧小平は翌1979年1月29日から2月5日までアメリカを初めて訪問しましたが、滞在中、また帰途に立ち寄った日本でも、しばしばベトナムによる国境侵犯事件に言及し、「制裁を加える」とか「教訓を与える」とか、武力攻撃を示唆する発言をおこないました。確かにこの頃、中国とベトナムの関係は緊張していました。前年の11月、ベトナムは中国の頭越しにソ連（当時）と友好協力条約を結び、この年1月にはカンボジアに侵攻して、中国と友好関係にあったポルポト政権をプノンペンから追い出しました。このほか、国内の大量の中国系住民を迫害して、中国に追い返すといったことも続けました。

ですから、中国国内にはベトナムは対米戦争当時に苦しい中から援助した中国の恩を仇で返しているという憤懣が高まっていました。しかし、だからといって、かりにも社会主義兄弟国であるベトナムに、今あげた程度の理由で中国が本気で武力侵攻をするとは、ほとんど誰も予想しませんでした。鄧小平の制裁発言はベトナムに圧力をかけたためのものというふうに受け取られていました。

ところが、鄧小平の帰国後、2月14日にベトナムに対する「自衛反撃」についての共産党中央の通知が出され、16日に開かれた共産党の幹部報告会では鄧小平がベトナムに対する自衛反撃について報告をおこないました。そして、翌日、中国軍は国境を越えてベトナムに侵攻したのです。当時、鄧小平は党副主席、副首相のほかに軍の総参謀長も兼ねていました。そして、この対ベトナム

戦が鄧小平のイニシアティブによる戦争であることは誰の目にも明らかでした。

それにしても、この戦争は不思議な戦いでした。中国はベトナムに制裁を加える理由をいろいろ挙げていたわけですから、侵攻した以上、首都のハノイに迫るなり、攻め込むなりして、とにかくベトナムに頭を下げさせて、制裁を加えるに至った理由を取り除かなければ首尾一貫しません。ところが中国軍はラオカイとランソンという二つの田舎町を破壊しただけで、3月5日、「制裁の目的を達した」と一方的に宣言して、撤退を開始したのです。ですから、ベトナムは頭を下げるどころか、「アメリカ帝国主義に続いて中国の侵略者も撃退した」と意気軒昂としていました。

この傍目にも中途半端な戦いは一体何だったのでしょうか。中途半端に終わった一つの理由として、ベトナム軍が予想以上に強くて、所期の目的を達せられなかったのだという見方がありました。確かに四年前まで長期間アメリカと戦っていたベトナム軍と、三十年も実戦経験のない中国軍がベトナム領内で戦うのですから、中国軍は不利だったと思われます。撤退の開始から完了までにさえ十二日間もかかっていることから、それは察しがつきます。

しかし、それだけでしょうか。私は違うように思います。鄧小平は会議の席で、華国鋒からポストはお互いそのままで、実権を奪うことに成功しましたが、次はそれを国民の誰にもわかる形で知らせなければなりません。この国を動かしているのは自分だとわからせるには、戦争を指揮して見せるのが、一番ではないでしょうか。私は鄧小平が国外でベトナムへの軍事行動を示唆する発言を繰り返したのは、一つは国際世論に観測気球を上げて、反応を探ると同時に、その軍事行動は彼の主導のもとに行われることを予告したのだと考えます。

戦いが中途半端に終わったのは、そういうデモ

ンストレーションであったからだ、というつもりはありません。それは結果であって、恐らく鄧小平本人にとっても、あの結末は不本意であったでしょう。しかし、戦況についての国内宣伝はどうにでもなります。そして、これから中国を統治するのは自分だと知らせるという目的は十分に達せられた戦争であったはずです。

とすれば、鄧小平の権力掌握も軍事行動と無関係ではなかった、ということになります。すくなくとも、統治権者としての正統性をアピールするのに、軍事力を掌握していることを内外に誇示したとは言えるでしょう。それから五年後の1984年の国慶節をご記憶でしょうか。この年は建国三十五周年ということで、久しぶりに天安門広場で閱兵が行われましたが、この日、鄧小平は乗用車「紅旗」の天井をくり抜いたオープン・カーにただ一人で乗りこんで、長安街に整列した三軍の兵士を閱兵したのです。この光景は中国の指導者は共産党総書記（当時）の胡耀邦でもなければ、首相（同）の趙紫陽でもなく、中央軍事委主席（同）の鄧小平であることを、あらためて内外に印象づけました。

さらに五年後の1989年6月3日から4日にかけて北京で起こったことは、もっとはっきりしています。あの悲劇について、当局は軍事力を使わなければ天安門広場および北京の秩序は回復されなかったと言っていますが、それは違います。

確かに5月の中旬の何日かは天安門広場や長安街はデモ隊で埋まって、政府権力の管理は及ばなくなっていました。しかし、20日に戒厳令が出されてから数日後には、つまり民主化を要求する学生たちに同情的であった趙紫陽が指導部内で敗れたことが明らかになるにつれて、運動は目立って低調になっていきました。天安門広場には後れて上京してきた地方の学生たちが、香港の民主派から贈られたテントでキャンプのようなことをしていましたが、北京の学生の多くはキャンパスに帰

り、市民生活も交通機関もほぼ正常にもどりました。

戒厳令直後に市内に進駐しようとした部隊は各所で市民の人波に阻まれて中心部に入れませんでした。この頃、部隊が発砲したのなら、善悪は別にして、秩序回復のためという言い分は理解できます。でも、さすがにこの時は軍は衝突を避けて引き上げました。もし、発砲したら、それこそ收拾がつかなくなったからでしょう。それが何故、市内がほぼ平常にもどった6月3日になって、実力行動を起こしたのでしょうか。それも市の中心部に向かう行進では、ほとんど無差別に発砲しながら進んだと言われています。

私はこれは北京の秩序回復といった目先の目的のためではなく、まさに政権維持のための行動であったと考えます。天安門広場がデモで埋まった5月の15日以降の何日か、人々はすっかり吹切れた感じで、「鄧小平下台（やめろ）」、「李鵬下台」といった過激なスローガンを叫んでいました。アメリカ帝国主義打倒やソ連覇権主義打倒を大声で叫んだことはあっても、自国の首脳にこういうスローガンを浴びせたのは、中国の国民にとって間違いなく初めての経験だったでしょう。

ということは、浴びせられた方も初めての経験だったはずです。ショックだったに違いありません。しかし、一党独裁体制の悲しさ、国民からあからさまに不信を表明された時に打つ手がありません。複数の政党が存在し、選挙の結果で政権が交代する仕組みがあれば、国民に信を問うて、信任されれば引き続き政権を担当し、信任されなければ野に下って他日を期せばいいのですが、そういう仕組みもなければ、野に下る気もないのですから、あくまで権力を握り続ける方策を考えるしかありません。となれば、「やめろ」などと叫ばれて、そのままにしておくわけにはいきません。俗の言葉を使えば、それではしめしがつかないでしょう。そこで、あの強硬手段が取られたのだと

思います。勝手なデモをし、勝手なことを叫べばこうなるのだぞ、と目にもみせる必要があったのです。

そう考えれば、運動がすっかり下火になり、市内の秩序も正常に戻ったあの段階での武力行使の説明がつかます。そして、なによりも、あの悲劇以降、デモなどの大衆行動が姿を消したのは勿論、それ以前にはあれほど盛んだった政治体制改革についての下からの論議もすっかり聞こえなくなりました。「政権は銃口から生まれる」と言った毛沢東の衣鉢を継いで、鄧小平は「銃口で政権を守った」のでした。

もっとも、鄧小平の権力を武力の面からだけ論ずるのは偏っています。華国鋒の手で三度目の失脚から救い出された1977年夏から彼が権力を握るまでの間、鄧小平待望論のようなムードがあったことは確かです。彼が毛沢東とともに革命を戦った元勲の一人でありながら、「白猫黒猫論」に見られるように毛沢東の政治優先路線とは肌合いを異にする現実主義者で、そのため毛によって二度も失脚させられた経歴が、文革に疲れた国民にとっては魅力だったのでしょう。

鄧小平は権力を握った直後、ベトナムへの軍事行動とほとんど同時に、一時は彼自身も世論工作に利用した壁新聞を禁止したり、民間雑誌で鄧小平の独裁的傾向を指摘して、注意を喚起した魏京生を逮捕したりして、権力的な面を見せますが、一方では改革・開放路線に踏み出して、沈滞していた経済を活性化させ、とくに農村に請負制を導入したことで人気を博しました。ですから、毛沢東のようなカリスマ的な支配者ではないにしても、鄧小平の権力にも大衆的な支持があったことは事実です。

しかし、改革・開放路線の負の一面として、党官僚の腐敗が拡がり、それに触発されるように政治改革を求める機運が高まり、それが胡耀邦の死をきっかけに1989年の民主化要求運動となって爆

発した時、そこで鄧小平が最後に採った手段もまた、十年前の権力掌握時と同じく武力であったことを指摘しておきたいのです。

こう見てきますと、共産党政権になってから行われた二回の権力者交代でも、つまり毛沢東から華国鋒へ、華国鋒から鄧小平へ、のいずれの場合も、新しい権力者の誕生は軍事力の行使をともなっていたということになります。鄧小平の場合には権力が危機に直面した時にも、自国民に対して武力を使いました。最初に申しましたように、統治権を誰が握るかについて合意されたルールがない以上、それは当然のことかもしれません。

——「鄧以後」の意味——

さて、その鄧小平も今年、1997年の2月に九十二歳（中国の数え方では九十三歳）で世を去りました。彼は天安門事件の後、その年の秋に最後まで手放さなかった党軍事委主席の地位をも江沢民に譲り（国家の軍事委主席は翌春の全人代で）、それ以後は一切の肩書とは無縁でしたが、だからと言って、彼が権力を手放したわけではなかったということには誰も異存はないでしょう。

1992年春の南巡講話は開放政策をさらに徹底して、その後の高度成長をもたらすきっかけを作りましたし、その年の秋の共産党14全大会では、軍内に大きな勢力を持っていた楊白冰を軍事委の秘書長から外して無任所の政治局員にするという荒技も見せました。とくにこの軍の人事は鄧小平だからこそ出来た、というのが、もっぱらの評価ですが、その通りだと思います。つまり江沢民は鄧小平がお膳立てしてくれた体制の上に乗ったにすぎないわけで、鄧小平時代から江沢民時代へというような、権力者の交代は起きていないというのが、私の理解です。江沢民も権力者たらしめた形跡はあります。1995年6月に台湾の李登輝総統がアメリカを訪問した後と去年春の台湾の総統直接選挙の前に、江沢民は演習と称して台湾海

峡にミサイルを打ちこみました。これが功を奏して、李登輝を会談に引き出すとか、あるいは彼の総統当選を阻むといった結果になれば、江沢民は胸をはって、自分は中国の権力者だと言うことが出来たでしょう。彼はそのつもりだったに相違ありません。しかし、残念ながらその思惑は外れました。

そうこうするうちに、鄧小平はいなくなってしまう。それなら、現在の状態をどう見ればいいのでしょうか。この報告のタイトルのように、権力の中枢が空白になった状態だと私は考えます。なぜかと言えば、これまで見てきたように統治権について合意されたルールがない中国ですが、ルールがなければならぬ、そこにはやはり一つのルールがあった。それは力を振るったものが権力を握るということです。その文脈からいえば、江沢民は鄧小平の権力の代執行者にすぎませんでした。その権力の元が今年の春に消滅した状態としか、現状は表現のしようがありません。

その空白状態が今後はどのように埋められるのか。この秋の十五全大会でその行方を示唆するような動きが出てくるかどうか、そこを注目したいと考えています。

追記

以上が研究大会における私の報告の概要であるが、その後、中国では7月1日の香港返還、9月12日から18日までの共産党15全大会、その翌日の15期1中全会と、重要な政治日程が無事に完了した。とくに15全大会では予測されたような江沢民と党内序列三位の喬石との間の権力をめぐる角逐も、少なくとも表面的には出現せず、平穩に江沢民をトップとする体制の継続が決まった。

私の報告に言う「権力の中枢が空白になった状態」と、この「江沢民体制の平穩さ」とはどういう関係にあるかについて、とりあえずの見解を以下に追加させていただく

——15期1中全会で決まった新しい指導体制——

・中央政治局常務委員会（序列順）

江沢民（総書記）、李鵬、朱鎔基、李瑞環、胡錦濤、尉健行（新、中央規律検査委書記）、李嵐清（新、副首相）。

・中央政治局委員（筆画順）・同候補委員（得票順）

丁関根、田紀雲、李長春（新、河南省書記）、李鉄映、呉邦国、呉官正（新、山東省書記）、遲浩田（新、国防相兼軍事委副主席）、張万年（新、軍事委副主席）、羅幹（新、國務院秘書長）、姜春雲、賈慶林（新、北京市書記）、錢其琛、黄菊、温家宝（新、中央書記局書記）、謝非。以下候補：曾慶紅（新、中央書記局書記）、呉儀（新、女、対外貿易経済協力相）。

・中央書記処書記

胡錦濤、尉健行、丁関根、張万年、羅幹、温家宝、曾慶紅。

・中央軍事委

主席——江沢民、副主席——張万年、遲浩田、委員——傅全有、于永波、王克、王瑞林。

——新人事の特徴——

以上の顔触れから、まず目につくのは、中央政治局常務委から14期では序列三位に位置していた喬石と六位の劉華清の二人が抜けたことである。とくに喬石の引退は意外の感を持って受け取られた。例えば香港の英字紙『サウスチャイナ・モーニングポスト』の高名な大陸ウォッチャー、ウィリー・ラム氏が邦字紙のインタビューに答えて「喬石が退いたのは予想外だった。故鄧小平氏に引き立てられただけの江沢民と、彼よりも年齢も党歴も上の喬石がこれまでも微妙なバランスで共存してきた。喬石を権力の座から引きずり下ろそうとすれば波乱を招いただろう。江沢民はうまくやめさせたが、詳しい状況は当分わからないと

思う」（日経 9月27日夕刊）とのべているのが、代表的な感想であろう。

勿論、これについては様々な推測がおこなわれている。曰く、大会前、江沢民は満七十歳以上の高級幹部の引退を提案し、自らも退く意思を表明したが、長老の薄一波が訪米を控えている江沢民の引退に外交的配慮を理由に反対し、結局、喬石（1924年生まれ）と劉華清（1916年生まれ）の引退だけが決まった。そのバリエーションとして、曰く、満七十歳以上の引退で合意が出来たが、1926年8月生まれの江沢民はその時点ではまだ満七十一歳になっていなかったもので、引退しなくてもよいことになった。曰く、喬石は外国にいる子女の問題（内容不明）を明らかにされるのを防ぐのと引換えに自らが引退した。曰く、喬石はかねて高齢者は引退すべきだと考えており、今回は淡々と身を引いた、等々。いずれにしろ、ラム氏の言うとうり「詳しい状況は当分わからない」だろう。

なぜ、喬石の動向が注目されたかといえは、来春の全人代ではすでに首相職を二期十年つとめたことになる李鵬が、憲法の規定によりその地位を離れざるを得ず、その行く先ポストとして喬石の持つ全人大常務委員長が有力視されたところからである。もし、喬石が現職に留まることに固執すれば、江沢民は自身の持つ国家主席を李鵬に譲るか（党総書記、あるいは軍事委主席を切り離して譲ることは考えられない）、李鵬を完全引退させざるを得なくなり、どう転ぶにしても、最高指導部内でなにがしかの確執が発生するのは避けられないと見られたからである。

もう一人、常務委から消えた劉華清は、1916年生まれという高齢から、引退は必至と見られていたから、消えたこと自体は予想どうりであるが、意外なのは彼に代わる軍の代表の常務委入りがなかったことである。事前の予測では軍から政治局に入った遲浩田、張万年のいずれか、おそらく江沢民との関係がいい張万年が常務委入りするもの

と見られていたが、結果はトップ七人から軍服がいなくなった。

その理由についてもいろいろ推測はおこなわれている。遅、張二人のライバル関係から、一人に絞り切れなかった。あるいは中国脅威論を気にして、五十万人の軍の人員削減と併せて、中国の平和指向をアピールした、などである。しかし、これも今のところはっきりしたことは不明である。

引退した二人に代わって常務委入りを果たしたのは、中央規律検査委書記の尉健行と副首相の李嵐清である。尉健行については党官僚の腐敗を取り締まる責任者がトップ入りすることで綱紀粛清への姿勢を示したのであろうし、喬石に連なる人脈に属するところから、その身代わりという意味もある。李嵐清の登用は対外経済担当の副首相としてWTO加盟などで、そのソフトな持ち味を活用する狙いであろう。このほか、李鵬に代わって次期首相への就任が確実視される朱鎔基が李瑞環を抜いて、序列三位に上がったのが注目されるが、首相という地位の重さから見て当然であろう。

政治局の構成では、14期のメンバーの内、姿を消したのは93年に死去した譚紹文、94年に汚職で解任された陳希同（北京市書記、当時）を除けば、楊白冰（前出）と鄒家華（副首相）の二人、同候補では王漢斌（全人大副委員長）である。この三人はいずれも七十歳を越えているから、順当な引退であろう。

政治局で注目れるのは、常務委員を除く委員と同候補合わせて十七人の内、昇格者と引退者の補充として、半数を越える九人の新人が登用され、前記の軍代表二人のほか、地方の一級行政区のトップである党書記が新たに山東省、河南省の二人を加え、従来の北京市、上海市、広東省と合わせて五人となったことである。

このほかでは、指導部の若返りに一定の成果が見られた。常務委五位の胡錦濤（54歳）を筆頭に委員では呉邦国（56歳）、温家宝（55歳）、李長春

（53歳）、賈慶林（57歳）、同候補で曾慶紅（58歳）と50歳台が六人を占めている。一方では喬石、劉華清の引退で、江沢民が最年長となり、その面でも江沢民の自前の指導部といった印象をあたえる。

——その評価・苦境の中の平穩——

さて、新指導体制がこのように構成されたことと江沢民の「権力」との関係はどうか。どのような事情かは別にして、ライバルと目された喬石を穩便に引退に追いこむことに成功し、年齢的にも自分がトップに立って、自前の体制を率いることになったという意味では、確かに江沢民の権力基盤は強固になったかのごとくに見える。

しかし、5月の報告において、権力の「正統性」を問題にした私としては、その面から江沢民体制の現状を考えないわけにはいかない。権力の「正統性」とは、「支配される側において、その権力の支配を容認するなにか」というのが、私における定義であるが、じつはそこには本来、分けて考えなければならない二つの要素がある。

それは「権力」という場合、それが意味するのは最高権力者個人か権力者集団かという問題である。5月の私の報告においては、それをとくに区別せずに「権力」あるいは「権力者」という言葉を使ってきた。その理由は、見てきたように辛亥革命以降、鄧小平までの歴代権力者はいずれも武力にその正統性を求めてきたのだが、その場合は最高権力者とその周りの権力者集団との関係と、権力者集団とその外側をとりまく被支配者大衆との関係は相似形であったからである。権力者は武力の支配者としての威信で周囲の集団メンバーに接し、集団メンバーは権力者に連なるものとしての威信で外側の大衆に接する。つまり、共産党内部における毛沢東の威信はそのまま党外の大衆に対する威信でもあった。

しかし、鄧小平による改革・開放路線の展開は次第にその相似形を崩してきた。その原因を突き

詰めれば、改革・開放政策によって個人および私的集団に経済活動における意思決定の権限を徐々に委ねてきたことに求められるであろう。1989年の天安門事件の発生そのものがその間の事情を物語っている。毛沢東時代に毛の名において発せられる命令を振りかざした末端幹部には頭を下げて従った大衆が、鄧小平の改革・開放路線十年の後では、末端幹部の不正蓄財（「官倒」現象など）に不満を募らせたのである。

毛時代の末端幹部も個人の私欲を追求したであろうが、あくまでそれは毛沢東の命令を執行する形をとった。しかし、改革・開放の中では、幹部の不正はその幹部個人の不正であり、それに対する不満の集大成としてあの民主化運動があった。「鄧小平下台」と過激なスローガンを叫んでも、それは象徴的なものにすぎず、運動の中心となった学生たちがあくまで権力との「対話」を求めたのは、彼らの運動が反体制暴動ではなく、「話せばわかる」、「理は自分たちにある」という体制内運動であったからであろう。失脚した趙紫陽が「運動はたいしたことはない」と戒厳令に反対したのも、同じ判断であったはずである。

それに対して、鄧小平武力で答えた。その結果は党の指導部内における鄧小平の威信は保持され、むしろ強まったとも言えるが（14全大会におけるイニシアティブなど）、大衆は彼を恐れはしても、共産党という権力集団を信用しなくなった。その鄧小平がいなくなった現在、共産党にはもはやかつての威信はない。

十五全大会はそういう地盤沈下しつつある集団における指導部の再編成であった。そこには権力闘争の発生を抑止する二つの要因があった。一つは地盤沈下しつつある集団内部で権力闘争を展開すれば、ますます地盤沈下するであろうという共通の危機感であり、二つにはそういう集団内部で権力を争うこと自体に対するインセンティブの希薄化である。この二つが相まって、指導部を形成

する人間たちをして、危険を冒して人の上に立つよりも、なお残された利権の応分の分け前を確保することに向かわせたのではないか。大会が平穏に終わった理由の一つはそこにあったと思われる。

もう一つ、江沢民にとって「不幸中の幸い」とでも言うべき事情がある。二十年近い改革・開放政策の実践は国民経済の富の総量を増やすという面では大きな成果を上げたが、それは主として外資企業、外資との合弁企業、郷鎮企業、私営企業といった新生の経済主体によって生みだされたものであって、かつての中国経済の中核であった国有企業は今や国家的な重荷になっていることは、周知のところである。

その難題に対する処方方はさっぱり見当たらない。15全大会では株式化という方針が打ち出されたが、それは国内外の資金を国有企業に呼びこもうというだけであって、ここまで不振を続けてきた国有企業を再生させるメカニズムが株式化それ自体に用意されているわけではない。しかし、とにかくそこに活路を見いだすしかないということで、その方向へ進もうとしている。

これまでの共産党の治世をふり返って見ると、いつの時代にも大なり小なり、対立する路線が存在した。毛沢東の急進路線には劉少奇、鄧小平の現実路線があったし、華国鋒の毛追隨路線には鄧小平の改革・開放があった。改革・開放の中でも各局面でアクセルとブレーキ両派が存在した。ところが、改革・開放路線のここまでの展開の結果、国有企業の不振、地域格差の拡大といった難問だけが眼前に横たわってしまい、誰も「自分ならこうする」という対案を出せないでいる。そうした追い詰められた状況が逆に指導部内の平穏をもたらしているのではなかろうか。

とすれば、今後は地盤沈下しつつある江沢民政権の政策がどこまで実効性を持つか、また近未来の次の政権はどこにその正統性を求めて権力を打ち立てるのかが、焦点であろう。